小中学生の子どもを持つ親と教職課程の大学生との語りあいを通した親支援
―「浜松市と大学の連携事業講座」の実践報告―

Parents Support Practice through Exchange among Parents Who Have Children of Grade School and/or Junior High School, and University Students of teacher-training course: Practices of "Partnership course between Hamamatsu-city and University"

若 尾 良 徳*

１．問題

本論文は，「浜松市と大学との連携事業」として公民館において行われた講座「現代の思春期を知ろう！～小・中学生の保護者と大学生との語り合い～」の実践報告である。小中学生の子どもを持つ親支援の場，および教職課程の大学生の親理解の場として行われた講座が，親と大学生それぞれにどのような効果をもたらしたのかを検証するとともに，連携事業の意義について検討することを目的とする。

１－１．思春期の親子関係

児童期後期から青年期にかけての思春期は，身体的にも，心理的にも，そして社会的にも急激に変化する時期である。身長体重の急激な増加，および生殖能力の発達といったように顕著な身体的成熟が生じる。また，抽象的な思考が可能になり，自分自身や人間関係を問い直し，アイデンティティ確立といった心理的な問題が生じる。さらに，周囲の友人たちや大人たちとの社会的関係も変化し，社会からこれまでとは異なる扱いをされるようになる。

また，思春期は親子関係のあり方が変化する時期でもある。思春期から青年期にかけては，心理的離乳と呼ばれ，親や家族の監督下から離れて，１人の独立した人間になろうとする衝動が生じる。また，思春期に入ると第二反抗期が生じて，子どもは親や社会などの権威に対して反発，反抗することがある。

こうしたことから，思春期は，親にとって子どもが分かりにくくなる時期であるといえる。たとえば，９歳から 14 歳の子どもを持つ親を対象とした調査では，我が国の子育てや教育の現状についての問題点として，59.9%が「家庭でのしつけや教育が不十分であること」を回答しており，また子どもに対して不安に思うこととして，24.0%が「子供の気

* 浜松学院大学（心理学）

持ちがわからないこと」を挙げていた（内閣府政策統括官, 2007）。

さらに，現代は社会環境の急速な変化により，思春期という時期が本来持っている困難さに加えて，思春期の子どもに以前には見られなかった新たな問題や課題が生じている。たとえば，携帯電話やインターネットなど情報通信機器やサービスの急速な普及は，子どもの生活や人間関係のあり方を大きく変えている。現代社会においては，親自身の子ども時代の経験が必ずしもあてはまらないために，思春期の子どもを持つ親が子育てに悩みや不安を感じやすくなっていると考えられる。

１－２．思春期の子育て支援の必要性

思春期は，親にとって子育てに様々な悩みや不安を感じやすい時期であることから，子育て支援が必要であるといえる。現在，我が国においては，子育てをする家庭に対して様々な支援がなされている。厚生労働省は，身近な場所に子育て親子が気軽に集まって相談や交流ができるような取り組みとして，地域子育て支援拠点事業を促進している。そこでは，①交流の場の提供・交流促進，②子育てに関する相談・援助，③地域の子育て関連情報提供，④子育て・子育て支援に関する講習等の実施が基本事業として行われている。このなかで，多くの子育てをする親にとっては，①交流の場の提供・交流促進が特に意義があると考えられる。なぜならば，近所の友人・知人のような身近な存在との交流から，子育てに関する情報を得やすいからである。たとえば，幼稚園児・保育園児の親や小学生の親を対象とした調査では，しつけ・教育の情報源として，近所の友人・知人が最も多く挙げられており（園児 67.9％，小学生 56.4%），同時に最も参考にする情報源になっている（Benesse 教育研究開発センター, 2008a, 2008b）。

ところが，このような子育て支援拠点のほとんどは，乳幼児を持つ親を対象としている。乳幼児の子育てについては，親同士が交流し，情報を得たり，経験や不安を共有したりできる場が数多く用意されているのである。浜松市においても，16 か所の子育て支援ひろば，65 の保育園で保育園親子ひろばが実施されており，また多数の子育てサークルや団体も活動している。

それに対して，思春期にあたる小中学生の子どもを持つ親が気軽に集まって相談や交流できる場は非常に少ないのが現状である。小学校以上の子育てについて相談したり，情報を得たりする場としては，教育相談や児童相談所がある。しかし，これらは，具体的で比較的深刻な問題について相談する場であり，日常的な小さな不安や悩みを気軽に相談したり，保護者同士で交流したりする場は限られている。すなわち，思春期の子どもを持つ親にとって，思春期は子どもがわからなくなり，対応に苦慮する時期であるにも関わらず，子育てに関して気軽に情報を得たり，不安や悩みを共有したりする交流の場は少ないのである。

１－３．教職課程の大学生の保護者理解の重要性

子育てをする親は，しつけや教育の情報源として，学校の先生や園の先生も頼りにしている。Benesse 教育研究開発センター（2008a ，2008b）の調査では，しつけ・教育の情報源として，幼稚園・保育園児の親の 48.9%が「園の先生」，小中学生の親の 35.6%が「学校の先生」と回答している。このような状況を反映して，現在の学校現場では，保護者対応が大きな課題となっている。文部科学省においても，研究課題として対応が議論されている（文部科学省, 2010）。公立の小中学校の教員を対象とした調査でも，76.4%の教員が，保護者や地域住民への対応が増えたと感じている（「とても感じる」,「まあ感じる」という回答の合計）（Benesse 教育研究開発センター, 2005）。このようなことから，教職に就こうとする者は，現代の子どもの発達に関して正しい知識を持つだけでなく，保護者の立場や気持ちを理解することが求められていると言えよう。

しかしながら，教職課程のカリキュラムにおいて，相談についての理論や技法を机上で学ぶ機会はあるが，実際に保護者と接したり，保護者から子育てについての不安や悩みを聞いたりする機会は設けられていない。また，一般的な子どもの発達については学ぶが，現代の思春期の具体的な問題について知る機会は限られている。教職課程の学生が，教職に就く前に，現代の思春期の問題や思春期の子を持つ親について理解する機会を持っておくことは重要である。

１－４．本実践の目的と期待される効果

以上のように，思春期の子どもを持つ親において，子育てについての不安や悩みを共有したり，現代の子どもについて情報を得るような交流の場は重要であるにも関わらず，十分に整備されていないのが現状である。また，教職課程の学生において，保護者と接して，保護者の立場や気持ちを知る機会がないという問題がある。そこで，本実践においては，浜松市と大学の連携事業講座のなかで，大学生が保護者に対して現代の思春期について大学において学んだ情報を提供するとともに，小中学生の子どもを持つ親と教職課程の大学生が，思春期の問題について語り合う場を設けることを目的とする。

このような語り合いの場を通して，小中学生の親，大学生にとって次のような効果が期待される。小中学生の親にとっては，子育てについての情報を得るとともに，不安や悩みを共有することができると期待される。また，大学生の意見を聞くことで，現代の思春期の子どもの気持ちを理解することができると期待される。大学生にとっては，小中学生の親の考えを聞くことで，親が子育てに対してどのような不安や悩みを抱いているか理解でき，親の子どもに対する気持ちが理解できると期待される。語り合いの場を通して期待される効果を Table1 にまとめた。

Table1 本実践の語り合いを通して期待される効果

小中学生の親にとっての効果
① 親同士が語り合うことで子育ての情報，および不安や悩みを共有することができる。
② 少し前まで思春期だった大学生の経験や意見を聞くことで現代の子どもの気持ちを理解することができる。
教職課程の大学生にとっての効果
① 親が子育てに対してどのような不安や悩みを抱いているか理解できる。
② 親の子どもに対する気持ちを理解できる。

以上のような効果が実際に得られたかどうかを明らかにするために，親を対象とした事前事後のアンケート調査，および大学生を対象とした振り返り調査と反省会を実施することで，効果測定を行う。

２．方法

２－１．浜松市と大学との連携事業の概要

浜松市と大学との連携事業の目的，事業内容は，Table2 に示した通りである。事業の主な目的は，「市民と大学生が互いに自己の学びを深めると共に，浜松市と大学が，連携・協力して生涯学習の取り組みを一層推進すること」である。平成 23 年度に行われた本実践は，パイロット事業として，浜松市と浜松学院大学とで実施し，成果・課題について十分に検証するものである。なお，事業の実施にあたって，事前に浜松市と大学とのあいだで協定を締結している。

２－２．講座の実施概要

以上の浜松市と大学との連携事業の目的を踏まえて，全３回の講座を実施した。大学は，講座の企画，提案を行い，子どもコミュニケーション学科のゼミナールⅠの授業の一環として実施した。浜松市は，公民館の会場の提供と準備，参加者募集，講座実施の助言を行った。

具体的な実施内容は，次のとおりである。

（１）講座名

「現代の思春期を知ろう！～小・中学生の保護者と大学生との語り合い～」

（２）実施場所

浜松市北浜南部公民館

Table2 浜松市と大学との連携事業の概要

目的 　浜松市生涯学習推進大綱に示された「学習成果を適切に生かすことのできる仕組みづくり」の取り組みとして，公民館等生涯学習施設で行われている講座開催の機会を大学生に提供することにより，市民と大学生が互いに自己の学びを深めると共に，浜松市と大学が，連携・協力して生涯学習の取り組みを一層推進することを目指すことである。 内容 ・　学生は，大学の学修過程の一環として，公民館等における講座の講師を受け持つ。 ・　講座内容について，大学と公民館等生涯学習施設職員とで協議し，地域の学習ニーズを踏まえ，企画，提案し，講座を開催する。 ・　講座の開催期間について，大学と公民館等生涯学習施設職員とで調整し決定する。 ・　浜松市は大学に学生の単位認定に必要と認める情報（受講者アンケート等）を提供する。 ・　チラシ作成費など講座運営上必要な経費については，大学と公民館等生涯学習施設で調整し支出する。 ・　講座開催に要する講師謝礼及び会場費は，無料とする。

（3）実施日時・テーマ

実施日時については，授業担当教員と公民館担当者の協議により決定した。また，各回のテーマについては，授業担当教員が決定した。

第 1 回　11 月 23 日（月）10:00～12:00　テーマ :「思春期の親子関係」

第 2 回　12 月 5 日（月）10:00～12:00　テーマ :「思春期の友人関係・遊び」

第 3 回　12 月 12 日（月）10:00～12:00　テーマ :「思春期の携帯電話・インターネット」

（4）募集定員

各回とも小中学生の親の募集定員は 15 名であった。

（5）参加者の募集

参加者の募集は北浜南部公民館が行った。公民館が発行している公民館だよりへの掲載，小中学校を通じてのチラシの配布等により，参加者を募集した。

（6）参加者数

全 3 回の講座を通じて，のべ 34 名の小中学生の親が講座に参加した。3 回とも参加が 5

名，2 回参加が 5 名，1 回のみの参加が 9 名であった。大学生については，子どもコミュニケーション学科のゼミナールⅠを履修している 3 年次の学生 8 名（女子学生 7 名，男子学生 1 名）の参加に加えて，男子学生が少なかったため 2 名の男子学生が参加した。1 名を除き，幼稚園教職課程を履修する学生であった。なお，すべての回に社会教育委員 1 名がオブザーバーとして参加した。各回の参加人数は次の通りである。

第１回　小中学生の親は，母親が 10 名，父親が 1 名の計 11 名が参加した。子どもの学校種は，小学生の子どものみの親 3 名，中学生の子どものみの親 4 名，小学生と中学生の両方の子どもがいる親 3 名であった。大学生は，ゼミナールⅠを履修する学生 6 名（すべて女子学生）が参加した。

第２回　小中学生の親は，母親が 13 名，父親が 2 名の計 15 名が参加した。小学生の子どものみの親 4 名，中学生の子どものみの親 4 名，小学生と中学生の両方の子どもがいる親 6 名，不明 1 名であった。大学生は，ゼミナールⅠを履修する学生 7 名（すべて女子学生）に加えて，男子学生 2 名の合計 9 名が参加した。男子学生のうち 1 名は教職課程でない学生であった。

第３回　小中学生の親は，母親が 6 名，父親が 2 名の計 8 名が参加した。子どもの学校種は，小学生の子どものみの親 1 名，中学生の子どものみの親 4 名，小学生と中学生の両方の子どもがいる親 3 名であった。大学生は，ゼミナールⅠを履修する学生 8 名（女子学生 7 名，男子学生 1 名）に加えて，男子学生 2 名の合計 10 名が参加した。男子学生のうち１名は教職課程でない学生であった。

（７）実施準備

本講座は，授業の一環として行われたため，ゼミナールⅠの授業の課題として準備を行った。各回の話題提供の担当者として 2〜3 名の学生が割り振られ，資料収集，プレゼンテーションの準備等の話題提供のための準備を行った。また，フリートークにおける話題の準備，ファシリテーターの練習を授業内で行った。

（８）実施内容

本講座は，前半に学生がテーマに関しての話題提供を行い，後半にテーマに関して小中学生の親と大学生が自由に語り合うという形式で実施した。講座のタイムテーブルを Table3 に示した。

講座開始前に受付において，講座の趣旨説明の文書とともに，事前アンケート，事後アンケート，名札を配布した。参加者には，全員に名札をつけてもらった。開場から講座開始までの間に，事前アンケートの記入を依頼した。講座開始後には，はじめに公民館担当者および担当教員から趣旨と進行の説明，および事前事後のアンケート調査に関する依頼を行った。説明後に，事前アンケートを回収した。次に，話題提供として，テーマについて学生が 30 分程度の講義を行った。話題提供終了後に，フリートークとして，３つのグループに分かれて親と大学生とで 1 時間程度の語り合いを行った。フリートークにおいて

は，学生 1 名がファシリテーターとして，司会進行を担当した。フリートーク終了後に，担当教員からの総括を行い，事後アンケートへの記入を依頼した。

Table3 講座のタイムテーブル

時間	イベント	内容
9:45～	開場	受付開始，事前アンケートの記入
10:00～10:05	講座開始	趣旨・進行説明，調査のお願い，事前アンケート回収
10:05～10:35	話題提供	学生による講義
10:40～11:45	フリートーク	グループに分かれての親と大学生の語り合い
11:50～	閉会	総括，事後アンケートの実施・回収

（9）話題提供の内容

学生が行った話題提供の内容は，調査結果や研究成果とともに，学生自身が思春期に体験したり，見聞きした情報を含めるように指示した。担当の学生 2，3 名が様々な情報を収集し，小中学生の親にとって有益であろうと考えられる情報をまとめている。

第 1 回は，「思春期の親子関係」がテーマである。現在の子育ての気がかり，子育ての悩み，親子の会話頻度や会話内容に関する調査結果を紹介している。また，ダメなしかり方，子育てにおいてストレスをためないための工夫，間違った受験勉強や学習についてまとめている。さらに，親子関係に関する大学生の体験談を紹介している。

第 2 回は，「思春期の友人関係・遊び」がテーマである。小中学生が土日に一緒に過ごす相手，友だちとのつきあい方，遊びの内容，よく遊ぶ友だちの種類，一緒にいて楽しい友だちについての調査結果を紹介している。また，テレビゲームの影響についての誤解と実証研究の結果，集団と非集団の特徴や短所・長所，良好な人間関係を作るためのコツをまとめている。さらに，テレビゲーム，および友だち集団とのつきあいに関する大学生の体験談を紹介している。

第 3 回は，「思春期の携帯電話・インターネット」がテーマである。はじめに，携帯電話の所持率，携帯電話を使い始めた時期，フィルタリングの利用率，携帯電話を持たせてよかった点についての調査結果を紹介している。次に，現代の小中学生における携帯電話とインターネットの問題として，ネットでのトラブル経験率，コミュニティサイトの現状と児童の犯罪被害，出会い系サイトによる犯罪被害，オンラインゲームのトラブルの調査結果や事例についてまとめている。さらに，出会い系サイトの利用に関する大学生の体験談を紹介している。

２－３．調査内容

（１）親への調査：参加者への事前事後アンケート

親へのアンケート調査は，匿名で行ったが，事前，事後のアンケート用紙に同じ番号を記入して，回答者のマッチングができるようにした。

①現代の思春期の子どもに対するイメージ（事前・事後）

現代の思春期の子どもに対するイメージを測定するために，他者に対する認知を測定する特性形容詞尺度を用いた（林，1978)。この尺度は，20 項目の形容詞対からなり，各形容詞対について，現代の思春期の子どもに対するイメージとして当てはまる程度を 7 件法で回答するものであった。講座実施前と講座実施後の 2 回行った。

②子育てに対する考え方（事前・事後）

子育てに対する様々な意見について同意する程度を 5 件法（「そう思わない」1 点，「どちらかといえばそう思わない」2 点，「どちらとも言えない」3 点，「どちらかといえばそう思う」4 点，「そう思う」5 点）でたずねた。項目は，「1. 親は子どもの一生に責任を持つ義務がある」「2. 子どもに伝えたい生き方や価値観がある」「3. 子どもは親の思うようにはならない」「4. 子どもは放っておいても育つものだ」「5. 子どもの話をできるだけ聞くことが重要だ」「6. 子どもを良くするには厳しい訓練やしつけが必要である」「7. 昔も今も，根本的には，子どもは変わっていない」の 7 項目であった。講座実施前と講座実施後の 2 回行った。

③子どもが思春期を迎えるにあたっての不安（事前・事後）

子どもが思春期を迎えるにあたっての不安の程度を 8 つの領域それぞれについて，5 件法（「不安に思わない」1 点，「どちらかといえば不安に思わない」2 点，「どちらともいえない」3 点，「どちらかといえば不安に思う」4 点，「不安に思う」5 点）でたずねた。領域は，「1. 体の成長・発達」「2. 生活習慣」「3. 親子関係・家族関係」「4. 友人関係」「5. 進学・受験」「6. 学校生活」「7. 男女交際」「8. 非行・問題行動」である。講座実施前と講座実施後の 2 回行った。

④講座への評価（事後のみ）

講座終了後に，講座に参加した評価や感想について，当てはまる項目に○をつけてもらった。項目は，「1. 楽しく話ができた」「2. 自分の子どもの成長，発達について考えた」「3. 大学生の話を聞くことができてよかった」「4. 他の保護者と話をすることができてよかった」「5. 話し合いの時間をもう少し欲しかった」「6. 大学生やスタッフの対応は良かった」「7. 大学生の話はわかりやすかった」「8. 全体を通して，参加して良かった」「9. 今後同じようなイベントがあれば参加したい」の 9 項目であった。

⑤参加を通しての気づきや感想（事後のみ）

現代の思春期の子どもたちや子育てについてなど，気づいたことや感想を自由記述してもらった。

⑥子どもの性別，学校，学年（事前のみ）

自分の子どもの性別，学校種別，学年を回答してもらった。複数の子どもがいる場合には，すべての子どもについて回答してもらった。

（２）学生への調査：振り返り課題と反省会

①各回の振り返り課題

各回の講座実施の数日後の授業時間内に，学生１人ひとりに振り返り用紙を配布して記入を求めた。各回の振り返りを，自由記述で回答を求めた。振り返りは，(1)フリートークの話題，(2)保護者の話を聞いての気づきや参考になったこと，勉強になったこと，(3)講座において困ったことや改善点の３点であった。授業の課題として行ったため，記名式で実施した。

②全体の反省会

全３回の講座が終了した後に，授業時間内に反省会を行った。気づきや学んだこと，反省点や改善点などを自由に話し合ってもらった。

３．結果と考察

３−１．フリートークの内容

学生の振り返り課題の記述から，各回のフリートークでどのような話題が語り合われたかを調べた（Table4）。

「思春期の親子関係」をテーマに開催した第１回には，家庭での会話，子どもへの伝え方・しかり方，反抗期，親密すぎる親子関係など，「親子関係」に関する話題が中心であったが，その他にも，いじめや遊び方・友人関係，携帯電話を持つことの是非など，幅広い話題が話し合われていた。「思春期の友人関係・遊び」がテーマとなった第 2 回には，テレビゲームの内容や是非，カードゲームの遊び方，子ども同士の力関係など，「友人関係・遊び」に関する話題が中心であった。「思春期の携帯電話・インターネット」をテーマに行った第３回は，携帯電話を持たせる時期，フィルタリングサービス，携帯等の利用制限の是非，携帯電話の料金，学校裏サイト・ブログ，オンラインゲームの課金の問題など，「携帯電話・インターネット」の機能や利用について，より具体的な問題について話し合われていた。

以上のことから，３回とも話題提供のテーマを踏まえた内容が中心であったが，テーマにとどまらず様々な話題が語り合われていた。

Table4 フリートークの話題

1回目	2回目	3回目
家庭での会話	テレビゲームの内容や是非	携帯電話を持たせる時期
子どもへの伝え方，しかり方	カードゲームの遊び方	フィルタリングサービス
反抗期	子ども同士の力関係	携帯等の利用制限の是非
親密すぎる親子関係の是非	子どもの遊びに対する制限	携帯電話の料金
父親，母親の役割分担	男女のいじめの違い	学校裏サイト，ブログ
兄弟関係	昔と現代のいじめの違い	オンラインゲームの課金の問題
身体の変化，性	親子の関係	携帯型ゲーム機の問題と機能
部活	子どもとの会話の内容への不安	GPS 機能
いじめ		Wi-Fi
勉強，塾，受験		スマートフォン
遊び方，友人関係		寝起きの悪い子どもへの対応
門限、帰宅時間		
携帯電話を持つことの是非		

３－２．親の意識の変化と気づき

（１）現代の思春期の子どもに対するイメージの変化

現代の思春期の子どもに対するイメージについて，事前事後の平均値と標準偏差を Table5 に示した。事前事後でイメージに変化がみられたかを調べるために，各項目について対応のある t 検定を行った。その結果，11 項目において事前事後で有意な変化がみられた。講座終了後には，現代の思春期の子どもについて，積極的な，ひとなつっこい，慎重な，重厚な，堂々とした，分別のある，親しみやすい，意欲的な，自信のある，気長な，というように，全体としてネガティブからポジティブな方向にイメージが変化していた。恥ずかしがりの（恥知らずの）については，恥ずかしがりというイメージからどちらともいえないというイメージに変化していた。また，心のひろい，責任感のある，感じのよい，の３項目で，有意傾向がみられ，これらの項目においても事後にポジティブな方向にイメージが変化していた。

先行研究においては，現代の大人は，一般的な今の子どもというものに対して否定的見方をしていることが示されている（住田・中村・山瀬, 2008）。事前アンケートにおける評価をみると，本講座の参加者も，講座に参加する前は，現代の思春期の子どもに対してやや否定的な見方をしていたと考えられる。しかし，他の親の意見を聞いたり，少し前まで思春期であった大学生の経験や気持ちを聞いたりする中で，子どもをポジティブに捉えるようになったと考えられる。

Table5 現代の思春期の子どもに対するイメージの事前事後の平均値と標準偏差および*t*検定の結果

	事前		事後			
	M	*SD*	*M*	*SD*	*t* 値	
1. 積極的な（消極的な）※	3.89	1.05	4.57	1.12	-3.17	**
2. 人のよい（人のわるい）	4.71	.97	4.74	.90	-.33	
3. なまいきでない（なまいきな）※	3.83	1.20	4.03	1.15	-.79	
4. ひとなつっこい（近づきがたい）	3.94	1.16	4.40	.98	-2.26	*
5. かわいらしい（にくらしい）	4.77	.81	4.77	.91	.00	
6. 心のひろい（心のせまい）※	3.60	.88	3.91	.78	-1.82	†
7. 社交的な（非社交的な）	4.11	.90	4.40	.91	-1.54	
8. 責任感のある(責任感のない）※	3.71	1.02	4.00	1.06	-1.71	†
9. 慎重な（軽率な）	3.76	.92	4.26	1.02	-2.77	**
10.恥ずかしがりの（恥知らずの）	4.51	.92	4.09	.70	2.51	*
11.重厚な（軽薄な）※	3.59	.61	3.85	.78	-2.32	*
12.うきうきした（沈んだ）	4.40	.81	4.54	.74	-1.15	
13.堂々とした（卑屈な）※	3.85	.76	4.30	.77	-2.33	*
14.感じのよい（感じのわるい）	4.40	.77	4.71	.99	-1.82	†
15.分別のある（無分別な）※	3.56	.79	4.29	1.00	-3.69	**
16.親しみやすい（親しみにくい）※	4.14	.94	4.54	1.01	-2.17	*
17.意欲的な（無気力な）	3.88	1.15	4.50	.99	-2.76	**
18.自信のある（自信のない）	3.59	1.08	4.24	1.18	-3.14	**
19.気長な（短気な）※	3.53	.96	4.03	1.00	-2.31	*
20.親切な（不親切な）	4.43	.81	4.57	.88	-1.41	

注） ** $p<.01$, * $p<.05$, † $p<.10$

注）※は逆転項目である。得点が高いほどポジティブになるように方向をそろえた。

（2）子育てに対する考え方の変化

子育てに対する考え方について，事前事後の平均値と標準偏差を Table6 に示した。事前事後で子育てに対する考え方に変化がみられたかを調べるために，各項目について対応のある *t* 検定を行った。その結果，いずれの項目においても，事前事後で有意な差が見られなかった。

このような結果が生じた理由として，本講座の参加者は，もともと子育てに対する意識や動機づけの高い人々であり，講座参加前から子育てについてしっかりとした考え方を持っていたと考えられる。このような子育てに対する信念は，短い時間では変化しないものなのであろう。

Table6 子育てに対する考え方の事前事後の平均値と標準偏差および*t*検定の結果

	事前		事後		
	M	*SD*	*M*	*SD*	*t* 値
1. 親は子どもの一生に責任を持つ義務がある	3.83	.98	3.86	.97	-.37
2. 子どもに伝えたい生き方や価値観がある	4.35	.60	4.24	.70	1.44
3. 子どもは親の思うようにはならない	4.35	.69	4.21	.84	1.22
4. 子どもは放っておいても育つものだ	2.56	1.21	2.82	1.22	-1.51
5. 子どもの話をできるだけ聞くことが重要だ	4.66	.48	4.60	.50	1.00
6. 子どもを良くするには厳しい訓練やしつけが必要である	2.89	1.02	2.89	1.05	.00
7. 昔も今も、根本的には、子どもは変わっていない	3.29	1.30	3.11	1.37	1.06

（3）子どもが思春期を迎えるにあたっての不安の変化

子どもが思春期を迎えるにあたっての不安について，事前事後の平均値と標準偏差を Table7 に示した。事前事後で子どもが思春期を迎えるにあたっての不安に変化がみられたかを調べるために，各項目について対応のある *t* 検定を行った。その結果，体の成長・発達，生活習慣の２項目において有意傾向がみられ，講座終了後にこれらに関する不安が高まっていた。

Table7 子どもが思春期を迎えるにあたっての不安の事前事後の平均値と標準偏差および*t*検定の結果

	事前		事後			
	M	*SD*	*M*	*SD*	*t* 値	
1.体の成長・発達	2.94	1.20	3.24	1.10	-1.77	†
2.生活習慣	3.50	1.08	3.65	.88	-1.71	†
3.親子関係・家族関係	3.21	1.15	3.15	.99	.49	
4.友人関係	3.76	1.05	3.88	.84	-1.00	
5.進学・受験	3.82	.94	3.76	.85	.49	
6.学校生活	3.70	1.02	3.67	.99	.37	
7.男女交際	3.29	1.09	3.29	1.03	.00	
8. 非行・問題行動	3.35	1.10	3.50	.96	-1.09	

注） † $p<.10$

このような結果が生じた理由としては，本講座の参加者は，講座開始前には子どもが思春期を迎えるにあたっての不安をそれほど感じていなかったが（5 点満点で平均 3 点台），語り合ううちに，他の親や学生から様々な問題について聞くことで，むしろ不安が高まってしまったのかも知れない。また，自分の子どもとそう変わらない「子ども」と思っていた大学生たちが様々な側面で大人であることに気づいたり，彼らの話を聞いて現代の子どもたちが自分たちの考えていたのとは異なる世界に生きていることを実感したりしたのかもしれない。

（4）参加を通しての気づきや感想に見られた効果

事後アンケートにおける参加を通しての気づきや感想の自由記述のなかで，講座に参加したことによる気づきや理解として次の点が挙げられていた。

①子どもへの接し方の理解や気づき

思春期の子どもに対して，親としてどのように接したらよいかについて気づいたという記述がみられた。

《記述例》

「思春期を迎えるにあたり，子どもの様子の変化などに今以上に気を配り，話を聞くことが大切だと感じた。」

「いつまでも小さい子扱いしてはいけない。」

「直接的な聞き方よりは，遠回しで子どもがしゃべり返しやすいアプローチをした方が，受け入れられるという話を聞いてなるほどと思った。」

「親子間，家族間よく話し合うことが必要である。」

「人間の成長としてはいつの時代でもかわらず大切にすることがあるので，そこも大事にいい関係で親子関係を気づいていくことが必要ですね。大人の側の知識や認識，コミュニケーション力を高めないといけないですね。」

②不安の解消

子育てに関する不安が解消されたり，気が楽になったりしたという記述がみられた。

《記述例》

「子どもの友人関係には，親としてどう関わっていけばいいのかという問題は，いつまでも解決はされないけれど，今回の話し合いで少し気が楽になりました。」

「フリートークで，自分の考え方を後押ししてくれた気がしました。学生さんと自分の子どもと重なって，安心して子育てできそうだと思った。子育てのアドバイスに十分役立った。」

以上のように，語り合いを通して，子どもへの接し方の理解や気づきや不安の解消がみられたことから，本講座の効果として期待された「親同士が語り合うことで子育ての情報，および悩みや不安を共有することができる」という効果があったと考えられる。

③「学生を通した学び」

大学生と語り合う中で，子どもの考えや気持ちを理解できたという記述がみられた。

《記述例》

「学生さんと話していて，子どもの考えを教えてもらって良かったです。」

「子ども側の話を親子だと真剣に話し合いできないので，子どもの気持ちを大学生の話を通して聞けるのは大変助かりました。」

「今の時代の学生さんの気持ちがわかりました。」

「学生さんのお話しを聞かせていただいて，子どもの話をしっかり聞いていきたいと思いました。」

「身近な子ども達（大学生）の思いが伝わってきました。」

「学生さんと直接話が聞けたことの中からヒントが得られました。」

④子どもや社会の時代的変化の理解

講座のなかで，現代の子どもや，それを取り巻く社会状況が以前と変わっていることに気づいたという記述がみられた。とりわけ，2 回目，3 回目には，テレビゲームやインターネットなど，新しいツールについての気づきや理解もみられた。

《記述例》

「数年の違いでも，子どもたちの成長や環境が変化していることに少し不安に思いま

した。」

「自分の時代とはずいぶんと違うと言うことがよく分かりました。」

「現在の子ども達がおかれている状況（社会環境）はかなり変わっているというか，親世代が通ってきた時代と違うので，親自身が知っておくこともたくさんあると思った。」

「ゲームの良いところ，悪いところが分かった気がします。子育てをするにあたっての判断材料にさせていただきます。ゲームで遊ぶことについてすべて悪いとなりがちだったが，今の子の生活の中には深くあって友だち関係作りに役立つほど浸透しているんですね。つきあい方や内容を考えてつきあわせたいです。」

以上のように，学生を通した学びや子どもや社会の時代的変化の理解がみられたことから，本講座の効果として期待された「少し前まで思春期だった大学生の経験や意見を聞くことで現代の子どもの気持ちを理解することができる」という効果があったと考えられる。

⑤男の子の気持ちの理解

その他に，男の子の気持ちを理解したという記述が見られた。

《記述例》

「男の子の心理がわかって良かったです。」

母親にとって，男の子のことを理解するのが難しいという問題はしばしば聞かれるところである。男子学生の経験や意見を聞くことで，男の子の気持ちが理解できたという効果がみられたようである。

３－３．学生の気づき

学生の振り返り課題における保護者の話を聞いての気づきや参考になったこと，勉強になったことの自由記述をまとめた。

①親の悩みや不安への気づき

親が子どもについてどんな不安や悩みを感じているかについての気づきがみられた。

《記述例》

「保護者の方は『これでよかったのか』などと，自分がしてきたことが良かったのかを気にする方が多かった」

「子どもにとっては遊ぶとき楽しくて夢中だけど，大人の立場になってみると，そういうことで心配しているんだと分かった。」

「“みんな持っている”という子どもの言葉に悩んでいる」

このことから，本講座において学生にとっての効果として期待された「親が子育てに対してどのような不安や悩みを抱いているか理解できる」効果があったと考えられる。

②思春期の子を持つ親の気持ちへの気づき

思春期の子どもを持つ親がどのような気持ちであるかについての気づきがみられた。

《記述例》

「思春期の子を持つ親の気持ちを知ることができた」

「子どもからしたらたぶん何とも思っていないだろうことも，親はわりと気にしていることもあることが分かった」

「子どもからすればうるさく感じることも，心配しての行動だと年をとるとわかるようになるのかと思った」

このことから，本講座において学生にとっての効果として期待された「親の子どもに対する気持ちを理解できる」効果があったと考えられる。

③子育てについての具体的方法の学び

親の経験や意見を聞く中で，具体的な子育ての方法を学んだという記述がみられた。

《記述例》

「勉強することに関して，『早く宿題しなさい』ではなく，『何時に宿題するの？』と子どもに自分で時間指定をさせる方法が良いと思った」

「勉強しなさいと口うるさく言うよりは，何回かは伝えるけど後は自分のためだから見守るという意見がほとんどだった」

④父親の育児参加の現状の理解

講座に参加した父親の考えを聞いたり，母親から家庭内での父親との役割分担の話をきくなかで，父親の育児参加の現状を学んだという記述がみられた。

《記述例》

「母親だけでなく，父親も子育てに関わるようになってきたと感じた」

「子どもをしかるとき，父親と母親でどちらか一方が怒る方となんとなく決めていた」

⑤コミュニケーションの方法についての学び

語り合いのなかで，人の話を聞く方法を学んだという記述がみられた。

《記述例》

「1 回目でファシリテーターをやりましたが，全員にそれぞれ意見をきいたり，ふったりするのは大変だと思った。でもこれを通して，人の話を聞くことの大切さや，どう聞けば，相手は快く話してくれるかが分かりました。」

３－４．講座への評価と改善点

（１）親アンケートにおける講座への評価の回答率

事後アンケートにおける講座に対する評価の回答率を Table8 に示した。

「大学生の話を聞くことができてよかった」「他の保護者と話をすることができてよかった」についてはすべての参加者があてはまると回答しており，参加者全員がフリートークでの語り合いに意義を感じていたといえる。また，8 割以上の参加者が，「自分の子どもの成長，発達について考えた」と回答しており，本実践の目的は一定の成果があがったといえる。また，「話し合いの時間をもう少し欲しかった」と回答したのは 40%であり，話し合いの時間は適切であったと考えられる。しかしながら，ほとんどの参加者が「全体を通して，参加して良かった」と回答している一方で，「今後同じようなイベントがあれば参加したい」と回答した参加者は 3 分の 2 にとどまった。この結果は，参加者が 1 回の参加で十分な効果が得られたと感じていると考えることもできるが，同じようなイベントに参加しようと思わないような何らかの問題や不満を持っていた可能性もある。アンケートだけでなく，参加者へのインタビューなどで，講座についての評価を詳細に聞く必要があろう。

Table8 講座についての評価の回答率

項目	回答率（%）
1. 楽しく話ができた	90.0
2. 自分の子どもの成長、発達について考えた	83.3
3. 大学生の話を聞くことができてよかった	100.0
4. 他の保護者と話をすることができてよかった	100.0
5. 話し合いの時間をもう少し欲しかった	40.0
6. 大学生やスタッフの対応は良かった	96.7
7. 大学生の話はわかりやすかった	90.0
8. 全体を通して、参加して良かった	96.7
9. 今後同じようなイベントがあれば参加したい	66.7

（２）親アンケートの自由記述にみられた問題点・改善点

事後アンケートの自由記述の感想において，次のような点が問題点や改善点として挙げられていた。

①話題提供の方法

フリートークに対する評価はポジティブなものがほとんどであったが，学生が行った話題提供については，改善が必要であるという意見が複数見られた。たとえば，「資料ばかりに目をおとさず，レーザーポインターを使い，話をして欲しかった」といった意見もみら

れた。

今回参加した学生は，大学におけるこれまでの教育課程の中で，与えられたテーマについて自ら資料収集して人前で発表するという経験をあまりしていなかった。本講座の準備に限らず，教育課程のなかで，プレゼンテーションの方法を学ぶ機会を設ける必要があったと思われる。

②時間帯

時間帯が平日の昼間であったため，仕事のため参加できなかった人がいたようである。アンケートの記述には，「私の周りには働いている方が多いので，平日午前仕事で参加できず，残念がっていました。」といった意見がみられた。また，参加者からも，友人が参加したがっていたが，時間帯があわなかったという声が多数聞かれた。

今回の講座は，3 回とも特定の曜日の同じ時間帯に開催したため，参加できる人が限られてしまったようである。今後は，複数の曜日で開催したり，平日と休日の両方での開催することで，誰でも参加できるような配慮が必要であろう。

③他の参加者情報の開示

フリートークの始めの自己紹介において，子どもの性別・学年を話していたが，一度に全員の情報を覚えておくことが難しいため，名簿を配布するなど，他の参加者の情報を伝えて欲しいという意見があった。

第 1 回には試験的に参加者全員の名簿を配布したが，2 回目から配布を行わなかった。しかし，名簿の配布はフリートークの円滑な進行に効果的であったようだ。名簿を配布することや，名札に子どもの学年と性別を記入することで，参加者間のコミュニケーションを円滑に進めることが必要であろう。

④内容が難しい

一部に内容が難しいという意見が見られた。たとえば，「内容については良いことなのですが，難しい内容なので，万人受けしないような気がします。もっとしぼりこんでもよいかもしれません。」という意見があった。

難しいと思われる内容や，用語については，話題提供において解説しておくなどの配慮が必要であったと考えられる。

（3）学生からみた問題点・改善点

学生の振り返り課題の記述，および反省会での発言にみられた問題点・改善点をまとめた。

①場所が遠い

開催地である北浜南部公民館は，大学から公共交通機関と徒歩で１時間程度の場所にあり、学生にとって，負担が大きかったと考えられる。また，事前に会場の下見をすることができず，リハーサルを十分に行うことができないといった問題も挙げられる。連携事業を継続して行っていくためには，移動の負担や時間を考慮に入れた場所の設定が必要であろう。

②フリートークの話の進め方

フリートークにおいて，話題がでなくて沈黙する場面があり，困ったという意見がみられた。学生にとって話題提供の準備が負担となり，フリートークの話題の準備や，ファシリテーターの練習が十分でなかったようである。

③親のニーズの把握の必要性

話題提供を準備する中で，親がどのような内容を求めているのか理解できず難しかったという意見がみられた。事前に何らかの形で参加者のニーズを把握することができれば，より意味のある話題提供になったと考えられる。

４．実践の意義と今後の課題

４－１．実践の効果

小中学生の子どもを持つ親への支援，および教職課程の学生の親理解を目指して行われた本実践は，期待された効果が十分に得られたと言える。小中学生の親にとって，子育ての悩みや不安を共有することができ，少し前まで思春期だった大学生の経験や意見を聞くことで現代の子どもの気持ちを理解することができたという期待通りの効果が得られた。また，男子学生の経験や意見を聞くことで，男の子の気持ちが理解できたという効果を感じている参加者もいた。さらに，思春期の子どもに対して持っていたややネガティブなイメージが，講座への参加を通してポジティブに変化していた。

教職課程の大学生にとっては，親が子育てに対してどのような不安や悩みを抱いているか理解することができ，親の子どもに対する気持ちを理解できたという期待通りの効果が得られた。また，親の経験や考えを聞くことで，子育てにおける具体的な方法や，父親の育児参加の現状を学んだと感じていた。語り合いそのものの効果として，語り合いのなかで，特にファシリテーターを経験するなかで，人の話を聞く方法や大切さを学んでいた。さらに，学生の振り返りや反省会にはみられなかったが，担当教員の目から見て，学生は準備を通して，イベントの準備過程や，プレゼンテーションの方法について，学ぶことができたと思われる。

以上のことから，思春期の子どもを持つ親に対する子育て支援として，また教職課程の大学生が保護者を理解するための学びの機会として，親と大学生とが子育てについて経験を交えながら語る場を設けることは，非常に効果的な実践であると言えよう。

４－２．連携事業としての実践意義

浜松市と大学の連携事業として考えたとき，本実践には次のような利点があったと考えられる。大学にとっては，公民館という社会教育の場を利用することができ，公民館が有している社会教育に関する実践のノウハウを利用できたというメリットがあった。たとえば，講座を企画する際の社会的なニーズについての助言，チラシの作成や広報などの参加者の募集，実施方法についての助言などがあげられる。大学から浜松市に対しては，大学の有する知的資源の提供，学生の経験や労働力の提供をすることができた。たとえば，新たな実践モデル，アンケートなどの調査方法，話題提供における知識，学生だからこそできる思春期の体験などの提供があげられる。

以上のように,講座を通して,浜松市と大学それぞれが有する資源を提供し合うことで,大学の目的である学生の教育活動，公民館の目的である社会教育を効果的に行うことができ,「市民と大学生が互いに自己の学びを深めると共に，浜松市と大学が，連携・協力して生涯学習の取り組みを一層推進する」という連携事業の目的を達成することができたと言える。今後，本実践は，教職課程をもつ大学が地域社会と交流をしていくモデルケースとなることが期待される。

４－３．本実践の改善点と展望

最後に，本実践の改善点と展望について述べたい。改善点として，まず話題提供の内容と方法の問題があげられる。親も大学生もフリートークにおける語り合いについては，非常に意義を感じていた。しかし，話題提供ついては，親からは発表の仕方についての不満の声があり，大学生からは準備過程において親のニーズが分からず十分な準備ができなかったという反省がみられた。講座における話題提供の位置づけと，内容および方法について検討していく必要がある。

また,参加者募集についても改善の必要がある。本講座の定員は各回 15 名であったが,定員を超える応募があったのは第 2 回のみであった。公民館には，公民館便りなどの一般的な広報だけでなく，小学校や中学校を通じて募集するなど，参加者募集に尽力していただいたが，小中学生の親支援活動として新しい試みであったため，内容や意義が理解されづらかったと考えられる。また，参加者が少なかったのは，曜日，時間帯が固定であったことも影響していると考えられる。より多くの方に参加してもらうために，講座の内容や意義を伝える努力をしていくとともに，複数の曜日で開催したり，平日と休日の両方での開催することで，誰でも参加できるような配慮が必要であろう。

最後の今後の展望として，このような実践を継続して行っていくことが重要性について述べておく。このような親支援事業は，前例がほとんどなく，参加したことがない人には，講座の意義が伝わりづらかったといえる。このような実践を継続して行っていくなかで，口コミなどを通じて実践の内容や意義が浸透していくことが期待される。

５．引用文献

Benesse 教育研究開発センター　（2005）　平成 16・17 年度文部科学省委嘱調査「義務教育に関する意識調査」報告書

Benesse 教育研究開発センター　（2008a）　第３回子育て生活基本調査報告書（幼児版）

Benesse 教育研究開発センター　（2008b）　第３回子育て生活基本調査報告書（小中版）

林文俊　（1978）　対人認知構造の基本次元についての一考察，名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科），25, 233-247.

文部科学省　（2010）　学校マネジメント支援推進協議会（平成 22 年度）http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/uneishien/detail/1301970.htm

内閣府政策統括官　（2007）　低年齢少年の生活と意識に関する調査 http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/teinenrei2/zenbun/index.html

住田正樹・中村真弓・山瀬範子　（2008）　教育者の「子ども観」に関する研究―教師・保育者を中心に―．放送大学研究年報, 26, 15-24.

謝辞

本実践を行うにあたって，北浜南部公民館の土屋辰治館長，細川恭由主事に多大なる協力と助言をいただきました。記して感謝を表します。